

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 翟 一達

本論文は英文で執筆されたもので、中国市民の民主主義に対する好意的態度と、権威主義的政府への支持という矛盾ある構造を解き明かし、その矛盾の由来を実証的に明らかにしたものである。論文の基礎となる実証データは、アジア規模および世界規模で実施された複数の国際比較調査の二次分析によるが、データ整備の統計的方法論、分析の方略に洗練された最新の手法を用いており、中国市民に関する政治社会心理学として確固たる知見を提出している。

論文第一部(1～3章)は研究の問題意識、研究の背景と論文の全体構造、そして方法論的考察に当てられる。研究目的である矛盾の構造は、政治文化による政治意識研究、近代化・経済発展理論による政治意識研究、一般市民の持つ民主主義の概念構造の研究により解明されるべきであることが説かれ、実証の課題が整理立てて提示される。第二部(4～5章)では、政治文化による研究アプローチによって、アジア的価値観と民主主義価値観・政治信頼との関連性の分析が進められ、上記の矛盾点を実証的に指摘される。第三部(6章～7章)では、近代化・経済発展の先行研究に基づいた分析の不足点が示される。第四部(8章～9章)ではこれまでの分析を踏まえ、中国市民が民主主義概念をどのように構造的に理解しているかの実証的な分析に進み、市民の抱く民主主義概念の構造が、他のアジアの民主制国家の市民と異なることが示される。政治的権利と参加を中心とするリベラルな民主的価値と経済平等・経済安全を基礎とする社会的民主主義の価値の概念化の差異の中で、中国市民は後者の価値によって中国の「民主主義」を支持し、かつ権威主義的政府に対する信頼を保っていることが判明した。第5部(10章)ではこれら知見の含意が検討される。

本論文は、これまでデータの不備だと指摘されたり、単に矛盾として放置されてきた中国市民の矛盾した信念と価値の構造を実証的に解き明かし、矛盾が市民の抱く民主主義概念の差異に由来することを浮き彫りにした。この点で高く評価されるべき論文であり、政治社会心理学の領域のみならず、民主化に関わる研究として広く知られるべき論文であると考えられる。中国市民に関する信頼できる全国サンプルの代表性あるデータが必要な研究であり、そうしたデータの獲得が困難であることから、論文は複数の二次データの分析に基づいているが、そのことが論文の価値をみじんも下げるわけではない。よって本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。